宍粟郷土会報
NO.39
46.12.1
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話②2000

大和十津川郷

中村　潔

奈良県の吉野郡は、途方もない大きな「郡」である。普通に我々が郡と呼ぶ常識では、とても考えられないような広大な範囲に亘っている。その面積は奈良県の二分の一以上を占めている。

然しその殆んどが、峨々たる山岳重畳の地帯で、その中央を、つい最近迄「女人禁制」でやかましかった行者修験の地、大峯山等のいわゆる大和アルプスが南北に走り、その右側が北山川の大峡谷となり、その左は十津川となり、共に南流して和歌山県の熊野本宮附近で合流し「熊野川」となり新宮市で太平洋に注いでいる。

「十津川村」は、この左側の渓谷である十津川に沿うた最南端のこれ又とてつもない大きな村である。

大和の五条市から、行宮跡と梅林で名高い西吉野村の「賀名生」を経て、天辻トンネルを抜けると、大塔村野辺川村とつづいて十津川村に至る。この辺り一帯がいわゆる「十津川郷」なのである。それは十津川の流れをはさんで、よく手入れの行きとどいた杉大な山林と、川沿いの僅かな平地や、山腹のあちらこちらに見る聚落と、ダムの連続である。

この地は、今次の大戦迄の日本歴史に載っていた神武天皇東征の際の大和進攻の道筋でもあった。この進攻路については、史家の間で、諸説紛々で、新宮市より更に東の三重県の熊野市或いは尾鷲あたりから北山川筋を遡上されたとする説もある。

然し自分が現地を訪れて親しく教えをいただいた地元の上野地郵便局の沼部園直氏によると、その造詣深い長年の研究のあとと、数々の実証から十津川通過説を信ぜ

目次

大和十津川郷　中村　潔　一
篠の丸・山崎城　島田　清　三
長水軍記（一）　五
水谷川の碑　一〇
郷土だより　一二
後記　一二
総会案内　一二

ざるを得ない。事実沼部氏は若い頃、聖上が此の地に臨幸の際、吉野郡郷軍の聯合会長として、この説を以て、晴れの御前講演の栄に浴して居られる。

奈良や京の都に近いこの地一帯は、飛鳥時代の昔から、南北朝へかけて数多くの悲史哀話にまつわる史跡や遺跡が随処に見られる。ここの土地柄が当時の宮廷人や著名な人士にとって、その権力失墜後の恰好の隠れ家であり、逃避亡命の経路であった為であろう。

更に又この地は、明治維新直前のあの有名な「天誅組」のゆかりの地である。尊王攘夷に明け暮れた幕末、公郷出身で元侍従を称した十九才の中山忠光を主将に擁して天誅組の面々が、文久三年孝明帝の大和行幸を乞い、その手始めに五条の代官所襲撃を敢行して、蹶起の火ぶたを切ったのであった。その挙兵目的は勿論勤皇討幕であった。代官所を襲ったのは、彼等が軍用金と多大の兵糧を入手する手段でもあった。

彼等の憂国の至情に燃えた壮挙も、その後京都御所に於ける廟議の急変で「天皇の大和行幸取り止め」つづいて「七郷の長州落ち」となり、天運日々に非となり、潰落敗退の一路を辿ったのであった。即ち徳川幕府は「天誅組追討」の令を諸藩に下して、逐次彼等を十津川方面に追いつめ、最後はその重囲の中で、大部分のものが自刃し或いは捕えられ壊滅して行った。

主将の中山忠光は、二三の従者と共に危く長州迄逃げのびたのであったが、ここも幕府捕吏の探査追求が急で遂にその地で暗殺されて果てたのであった。

十津川の地が、往昔からどうしてこうした幾多の悲憤の哀史に彩られねばならなかったか。それは前にも述べたように、山岳重畳、交通の険峻至難の地勢が屈強の天然の要害であっことと、往昔から天皇及びその一族の人々の出入りが屢々であった為、尊皇勤王の根強い精神がこの山岳に囲れた地に芽生え育ち、伝統的な「十津川郷士」の気骨気風を生んで居た為であろう。然し今、天誅組の組織そのものを、当時の記録によって仔細に点検して見ると、その源動力となった主謀者達の中にも、幹部級の中にも、十津川郷士と見られる人士は一人も見当らない。三総裁の藤本津之助（備前）松本謙太郎（三河）吉村寅太郎（土佐）を始め小荷駄奉行に至る迄、凡て広く東海、中国、四国、九州を網羅した志士達の血盟結合のグループであった。十津川郷士は単に一兵士としてまた一歩卒として挙兵に応じ、又色々な部面で支援協力したに過ぎないように思われる。

この広大な山岳地帯の十津川郷も、自給自足の生活が困難となった明治以後、追々に人口の流出漸減がつづき更に今次大戦後は、国内の山間僻地が何れも然うであるように、日一日と過疎化現象を濃くしていることはやむ

を得ないことであろう。今日北海道の旭川近くに在る「新十津川町」は、明治二十二年に、この地を襲った大水害の際、十津川未曽有の大氾濫に押し流され、先祖伝来の田畑を復旧する由もなく、新に生きる新天地を求めて、大挙移住した十津川沿岸の人々の営々として築き上げた汗と涙の結晶の町なのである。

ー完ー

篠の丸城・山崎城

（島田清氏編「播磨の古城」より）

篠の丸城

山崎は、宍粟郡の南東部に開けた平地の北方段丘上に位し、北に山を負い、南に平地を望む要地を占めています。この地が早く開けたことは、石器時代の遺跡や古墳が多くのこっていることではっきりしていますが、律令政治が施かれるようになると、郡衙が置かれ、政治、経済、文化の中心地として発達しました。赤松則祐が、郡内をおさめる拠点として、ここに着目したのは当然のことで、城地を背後にそびえる山上に設けました。標高三三八メートルの山上をならして、ここに本丸・二の丸を設けて主要曲輪とするとともに、ここより南東に尾を引く丘陵の一角に「千畳敷」と呼ばれる曲輪を設けました。郡内の城地としては最も早く整備されたものであり、西方に設けられた空濠のあとも残っています。平素の居館は、さらに、この下方に広がる山麓台地の上に設けられていましたが、これ以来、山崎の地は、ますます発展するようになりました。

則祐は、その後、則村のあとを継いで白旗城に居城することとなりましたので、篠の丸城は、猶子の頭則に与えられました。頭則は、暫くこの城に住んでいましたが播磨の国府に近い飾磨郡豊国村に庄山城を築いて移り、あとには、一族の宇野師頼が入ってきました。師頼は、この城の北方にそびえる蔦沢の長水山城が、篠の丸城より、遙かに要害に富むことを見て、ここに築城し、本拠を移しました。篠の丸城は、これより、長水城の出城（支城）となり、宇野氏の一族もしくは重臣が居住して、長水山城と運命を共にすることとなりました。すなわち、嘉吉元年の赤松満祐の乱と、天文年間の尼子氏侵入のとき、並

びに天正八年の秀吉攻伐に際して落城し、近世以後は全く、廃城となったわけで、現在は、城跡一帯が山崎町の背山公園となっています。

山崎城（鹿沢城）

天正八年、豊臣秀吉は、播州平定の功によって、信長よりこの地を与えられ、功臣を各地に封じました。山崎はこのとき、黒田孝高に与えられ、孝高は篠の丸城の山麓に居館をつくりました。しかし天正十五年、豊前中津へ移り、あとは、竜野城主である羽柴勝俊に併有されました。勝俊はいうまでもなく秀吉の甥で、後に若狭少将となった武人であるとともに、細川幽斉と並ぶ当代の二大歌人でもありました。したがって、関ケ原戦後は、長嘯子と号して東山に閑居し、専ら新しい歌風の振起につとめました。近世の国文学史上、偉大な足跡をのこしたのはこのためですが、山崎に封ぜられたときはまだ青年時代で、孝高のあとをうけて山麓台地に曲輪を設け、四方から農民を呼び寄せて城下町をつくるなど、多くの事蹟をのこしました。

慶長五年、関ケ原合戦の功によって播磨五十二万石の大封をうけた池田輝政は新しく姫路城をたてて天下の耳目を聳動しました。宍粟郡には、このとき重臣、中村主殿助が来住し、山崎に居館を設けました。しかし、まだ「城」というほどのものではありませんでしたが、元和元年、輝政の第四子、輝澄が城主となったとき、ようやく城郭が築かれることとなりました。すなわち、梯部式の縄張り法により、台地の南端に本丸を設け、その東・北・西方の三方に二の丸、三の丸、さらにその東方と西方に士族屋敷を配するとともに、北方の山麓に町人街を設けました。これが現在の山崎町で、山崎町立小学校は、即ち、本丸のあとに建てられたものです。そしてその正門は、もとの本丸大手門にあたり、透しのある門扉をつけた高麗門として注目されています。また、この西北にある塗込造りの倉庫はもと東南隅にあった隅櫓の遺構で、大手門とともに貴重な遺構とされています。城下の東方、大手口にあたる清水口の坂道やその内内に建てられた藩主の菩提寺、青蓮寺なども古い城下をよく残した場所であり、鹿沢町や西新町には、士族屋敷内町家の古いものも散見されます。

山崎城の表高は、池田輝澄のときが最も多くて、六万一千石ありました。しかし、その後に入ってきた松平康映のときは、五万石、さらにその後の松平恒元のときは三万石に減じ、延宝七年に入って来た本多忠英は僅か一万石に過ぎませんでした。したがって、山崎城は、築城当初の規模が維持できず、本多家時代はやや縮少された感がありましたが、他の一万石の藩地、安志・林田・粟賀・小野・三草などに比べると、ズバ抜けて整った城地をもっていました。

長水軍記（一）

長水山は、宍粟郡山崎町五十波にあり、現在は長水山信徳寺という宗教法人の御寺が山頂にできて、信仰の場となり、宿坊や墓所がある。この高い山上に足利時代に城があり、長水城と称し広瀬氏五代、宇野氏五代にわたり在城、宇野下総守政頼の時ー天正八年（一五八〇）五月八日に落城し、廃城となったと伝えられる。もっとも、秀吉が攻略して落城した日は、橋本政次の考証では、五月十日となっているが、地元では、昔から五月八日落城九日千種にて政頼ら自刃したことになっている。城の規模は、周囲二十四町（二・六粁）本丸四十間、出丸五間四方と伝えられているが、落城後切りくずされて、現在のところ狭くなっている。西播地方でにらみをきかしていた事は事実で、大名格にすれば十余万石の格式があったらしい。

長水時代の文献は、少なく、ただ五十波に城主屋形のあと、武家屋敷趾が残り、搦手の鳥沢の方に、上町、下町、殿町などの町名があって、長水城華かなりし時代の名残りをとどめている。この長水落城の仕末を書いた「長水軍記」という写本があり、軍記物というべきか、とにかく事の次第を詳しく書いたものである。ただし、史実と合致するかどうかは疑問である。近頃なかなか写本にも御目にかかれないので、本会報に連続掲載して読んで頂きたいと思う。初めの系譜と総目次は、都合で後廻しとして、本文だけ何回かにわけて出します。作者は不詳、著作時代は恐らく江戸中期であろうか。

（長水軍記）

宇野下総守源政頼所領の事併に宇野家由書の事

天下は一人の天下にして、一人の天下にあらず。天下は天下の天下なりとは、杜牧之が阿房宮の賦に残せし萬代不朽の金言なり。亦孫子曰、兵は勝を尊しとして久しきを尊ばず。故に能く兵に通ずるの良将は、民の司命、国家の主なり。爰に本朝足利義政公の治世に当って、応仁の乱起りしより以来、英雄豪傑四方に割拠して、戦争絶えず。元亀天正の際に至り、其勢最甚しく、天子将軍あるを知らず、此時に当り豪族の最大なる者は、関東の上杉及び北条、陸奥の伊達芦名、甲斐の武田、越後の長尾、駿河の今川、美濃の斉藤、越前の朝倉、畿内の三好出雲の尼子、安芸の毛利、周防の大内、四国の長曽我部豊後の大友、肥前の竜造寺、薩摩の島津、尾張の織田等

各種和洋酒問屋
食料品卸問屋
三輪又商店
TEL②一一七三

種物
漬物
調味料
米・麦
もやし
三木金之助
八幡神社下
TEL②一二一五

の諸氏にして、中にも織田信長は、隣国を征し其武威畿内に振う。遂に四方を平定するを以て志となす。故に北国へは柴田勝家を討手とし、関東北条へは滝川左近将監一益、四国へは信長の三男信孝、丹羽五郎左ヱ門長秀、丹波へは明智日向守光秀、中国へは羽柴筑前守秀吉を遣し、所々国々に手を配りける。

爰に足利尊氏、自ら将軍の名を称せし時、播磨国を其党赤松則祐に与う。則祐国内を巡視して宍粟郡に来り、地勢を観て曰、此地険　の固めあり、産物豊かにして地の利、軍の用二つながら備わり守るに便にして、攻むるに難く、嘗つ但馬路の要衝なれば、此国を守るもの此地に備えながるべからずとて、上の山に笹の丸城を築き、同族赤松顕則をして之を守らしむ。後顕則飾東郡庄の山に移る。此時則祐又長水山に一城を築き其四男広瀬宮内少輔師頼をして之を守らしむ。其後広瀬満親長水の城主たりし時、当国の主赤松満祐、時の将軍足利義教を弑せし罪により、誅伐せらるるに及び長水、笹の丸両城共没落して廃城となりしが、後赤松政則当国を領せし時、長水城及笹の丸を改築し、長水城は同族宇野加順をして之を守らしめ、笹の丸城は、其重臣をして之を守らしむ。それより長水城は、加順より代々相続いて出羽守頼康子なきにより宇野国之の子将則其孫親太夫朝村、頼康の養子となりしが、朝村多病多病にして家をつぐこと能わず故に弟則親に譲る。夫より満親、満頼、政頼に至る迄七世の間、長水山に居城せり。宇野下総守政頼は、次男祐満と長水に居りしも、其長男熊見蔵人光景をして笹の丸を守らしむ。此時伊和の郷岡城には、政頼の家臣岡城豊前守、其子豊後の守相ついで之を守り、杉ケ瀬の城には一族宇野日向守祐久これを守る。清野の構是なり。高家の庄都多村の城には一族宇野妥女正祐政之を守り、土方島の子城には、一族六衛門尉祐光之を守り、千種の郷黒土村の城には政頼の家臣石原右京太夫、其子勘ケ由相続して之を守り、林田の城には、一族政頼の四男本郷治郎兵衛祐行之を守る。其他赤松兵部大輔貞俊は、播州小塩城にあり、同国佐用郡大平の城には赤松蔵人政則之を守れり。然るに斯く堅固たるにも係らず、速に没落せるは内に不忠奸佞の臣ありて之を招けるによれり。

天正の頃、織田内大臣平の信長、其臣羽柴筑前の守秀吉をして播州を平定せしむるに当り、佐用郡大平の城主赤松蔵人大輔政則、地頭の諫言を用いず、秀吉と戦い遂に敗北して天正五年十二月十八日自害せり。

長水の城主宇野下総守源政頼は、秀吉の播州を平定せ

んとするに就き、其一族家臣を集め、去就を評定せしむ。然れども、政頼は先きに佐用郡大平の城主、秀吉と戦い敗北して自殺せるを甚だ遺憾の事に思われ、秀吉に降るを欲せず。然れども其臣宇野内匠、諫めて申けるは、今秀吉に対し天下に敵するものあるべしとも覚えず。三木の別所、備前の浮田とても頼み少し。故に今度は、是非に秀吉に降り給へと云いければ、諸臣等も之を良計なりと申ける。政頼は、快よからざるも、之に従い、茲に評議一決しければ、一先ず秀吉公に降を乞ふべしとて、家来加賀刑部清水越中を以て秀吉の家士谷大膳の助に頼まる。大膳秀吉公へ此旨申上げれば、秀吉公之を許用ありて、本領安堵を免する。

爰に同国飾磨郡姫路の城主小寺官兵衛孝高というものあり。兼て宇野政頼と領分を争うて止む時なし。然れども、小寺は兵寡きを以て、宇野政頼と戦いなば敗を取らんことを思い常に之を遺憾とせり。然るに今羽柴秀吉播州へ出陣せるに力を得て秀吉に請ひて言うには、私御味方となり当国の氏族を亡し、其序を以て宇野氏をも滅亡させんと、私の遺恨を以て種々秀吉に説くといえども、寛仁大度の秀吉なれば、敢て之を聴入賜はず、能くよく宇野氏の去就を探偵の上万一服従せざる時は、之を征伐するも何の遅きことか之あらんと云われければ、諸大将も此儀然るべしとて、評議一決しければ、即ち木村、樋口の両将に荒木平太夫を差添え長水城へ遣しける。

笹の丸城主熊見蔵人光景反逆の事

扨て是より始、長水の城主宇野下総守政頼は、次男祐清を愛すること兄光景に過ぐるを以て、光景常に弟の為に其嫡を奪はれんことを恐る。而して、其行い正しからず、其臣に安積弾正、有元治郎右ェ門、清水八右ェ門等姦佞の者ありて、光景に勧め申けるは、今の如く政頼公二男民部少輔祐清殿を愛し玉わば、御家督相続は必ず祐清殿に譲り給うべし。君は正しき嫡子に候わずや、長男の君を差置き御二男民部殿に御世を譲り賜れば殿の恥辱之より大なるはなし。其上民部殿にも快くは思い賜わざらん。大殿かくてある内は、気遣なくとも大殿果なくなり賜はば民部殿君を亡し給はんと　掌を返すが如し、今の謀をなすに長水の父子をはかって、殺害し給はば拾四万石を領

し給い、近隣の諸候従い靡かんこと更に疑有べからずと言葉を巧にしてすすめけれども、光景かって同心なく、何ぞ左様に無道なることを為すべきとて、返す返すも之を恥しめて居られける。或時光景の家来と祐清の家来と口論しければ政頼之を裁判せしに光景の臣悪しければ切腹申付、其上かようのこと出来せしは、光景の罪なればとて光景に以来注意せよとて、大いに怒てしかり給いければ、元より愚智なる故、心中甚だ之を恨み祐清父子に此のうつぶんを晴さんと思いおられける。此時かの安積有元、清水等の倭臣は大いに喜び、よき時機を得たりとて、光景に讒して申けるは、ひそかに承るに民部の大輔殿は君の御舎弟にて渡らせ候へども、大殿の愛を奇貨とし、君を讒して亡さんとの企て世間にこれ有候。其時に及んで君如何程後悔なし給ふとも更に其詮あるべからず。必ず長水の父子を切害し給ふべし。然らば十四万石を領し給はんこと疑あるべからずと申ける。元来暗愚の光景なれば、欲心に迷い遂に此企てに同心せるこそ浅ましけれ。茲に於て光景は兎角かようの企は、一日も早からざれば成就せぬものなりとて、其臣柏原正兵衛、千種太郎を使者として茶の会に招待せられける。長水の父子は元よりかかる企あることは夢にも更に知るよしなければ、父子同道して趣くべしとぞ云い返しぬ。然るに、天に口なし、人を以て云はしむるとの古金言の如く、世間に此風聞ありければ、祐清の近侍林助三郎右の旨を申されければ、祐清は其人となり正直律義なれば、何ぞ熊見にかかる企あらん。此は必ず空言ならんと申されければ、助三郎又申には、公の命最の様には候へども、当時の人は子にして父を害し、臣にして其君を弑す。其例あげて数ふべからず。只願わくば、御出遊の日を延ばし能く実否を正し、其実ならざる時に御出遊あるべしと申しければ民部殿も之に従はれ、父政頼に申されければ、政頼大に怒りて討手を差向けんとせられければ、祐清之を見て諫めて申さるるには、大凡斯の如き事は中に悪人ありてかかる流言をなすこと多し。今は討手を向けなば、後悔することあるも計りがたし。能く其実否を正し、然る後討手を向けらるべしと申されければ、政頼も之に従はれける。

去程に、篠の丸光景の臣に高嶋甲斐と云う者あり。政頼の許に至りて光景の陰謀を語りければ、政頼も今は疑うべきにあらずとて、討手を差向くべきに極り、其準備をぞせられける。然るに、光景は陰謀の露顕せることを夢にも知らざれば、茶会の期日に至り高嶋甲斐その妻子を連れ長水へ至れりと聞き、扨は我企を知られしものと悟り、今は是非なし、一先ず作州の方へ落ちて見んと俄に其支度を急がれける。斯るところへ、政頼は、同姓妥女正祐政を大将として百余人の討手来りければ、今は中

中逃げ去ること叶はず主従都合七十余人笹の丸坂口にて劇戦し、又伊沢川の渡り迄来りけるに、其人数漸々十余人にうちなされ、光景も手負いしが、元より必死となりし勇士なれば、祐正の方にも負傷戦死者夥しかりし。光景も今は是迄と思ひしかば、残兵をして敵を防がしめ、心静かに自害せり。残り十余人、今は心安しとて討死せんと戦いけるが、其身金鉄にあらざれば数多の疵を被り引組んでは差違へ、遂に討死したりしは、勇しくこそ見えたりける。然るに、有元治郎右ヱ門いかにして逃れけん、何処ともなくにげ失せける。其後笹の丸は、明き城となり暫く無事にそ過しける。

秀吉の使者長水へ来る事並に政頼姫路城に出仕の事

扨話は、前へと戻り、天正八年庚辰の三月十日羽柴筑前の守秀吉の三使木村、樋口、荒木は、長水城へ着しけるが、此時長水城主政頼は、一族郎党を集め酒宴をなし給ひしが、秀吉の使者来れりと告ぐるものありければ、乃ち内海、長谷川、横野、下村出迎へて内に入れ、城将平野政頼に対面す。此時一族郎従寄り集りたることなれば、綺羅星の如くに居並て使者よりの口上、今や遅しとかたずを呑んで相待ちける。三使席を正して申けるは、此度主人中国討手を承り下向に及び候。依て秀吉に従ひ給はば早々姫路へ出仕致さるべく、若御異儀あり候へば一戦に雄雌を決し申すべしと敢然として述べければ、城将政頼は、暫く思慮し申され候は、一同評議の上回答すべしとて、内海を案内として使者を使者の間へ通しける。夫より三使は返事如何に待居たり。政頼は、一同を評議しけるに重清進んで云ひけるには、当家は先年より毛利の命を受け今又織田の下知を受くるは、武将の義にあらず、唯使者の首を切り、一人を返し秀吉が寄するを待って毛利へ援兵を乞ひ、内外より挾み討ち、其虚に乗じて織田を責め落すべし。唯毛利と謀を合せば何をか恐れんやと申しける。祐清進んで曰、若し援兵来らざれば如何せん。重清曰、其時は快く討死すべしと。其評議未だ決せざれば、祐清曰、両君の論各一理あり。然りといへども、使者を殺すは憶したるに似たり。其上当時織田に敵するものなし。毛利とても日ならず織田の幕下とならん。今秀吉兵を分ちて毛利を押へ、当方を急に責めば、落城眼前にあり。夫よりは先づ織田に随身し、其後機を見て如何ようとも謀るべしと、理を尽して申されければ、政

氷・鮮魚問屋
折詰・仕出し
中村鮮魚店
TEL②二四六八

和洋各種食料品販売
有限会社 八百福商店
TEL②〇四一三

頼を始め一同此論甚妙なりとて一決したりける。

扨使者に服従の旨答へければ、三使は礼を正し、皈を告げて退出しけるにより、政頼、祐清、祐政、祐清、祐光の一族を始め其外小林重祐、春名光俊の諸将並に郎従等城門まで見送りたり。

却説翌日、即ち天正八年三月二十七日城将宇野政頼は数十人の将士を召し連れ、長水城を出発し、同日薄暮に姫路にぞ着しける。其日は、小寺氏の館に宿し、翌日登城なし、次の間に控えて様子如何にと相待ける。此時秀吉は、某士と碁を囲み心を碁局にのみ移して政頼には面会致さざりしこそ口惜しけれ。目にもの見せて呉んずと云ひ将士を引連れ長水城へと帰り給ひぬ。

水谷川の碑

宍粟郡波賀町上野公民館前に、「水谷川に捧ぐ」という懐旧の碑が、垣口市郎治氏ら十名の有志で建設された。一ツ山に源を発した水谷川の清流の今昔を皮肉にも思い出の詩として綴ったもの、碑面文は左のとおり

おさない頃の水谷川には、どろぼい、あたんぼち、ひらべ、むぎつき、赤にこんじょが沢山いた。赤にこんにさされて泣いたこともあった。六月ごろ熱心に夜づけをした。時たま、みみづうなぎがとれるうれしさが、忘れられず、朝早く起きられたのも、この夢があったからだ。なかすの前を麦わらでせきとめて、水あびに夏休みをすごした。牛のべこずれの川入れも、ばんがたよくみられた。ほんとに水谷川さんありがとう。私達のころの唯一の遊び友達であった。まして、有終の美をのこした人達も君のおくりものの下にねむった。時代が変ったのか、水谷川の姿はもうなくなった。とてもさびしい。せめてもありし日の水谷川を思いうかべ、自然よどこへいく。

昭和四十六年六月

やけこき一郎建之

郷土だより

○ 山崎町美術展覧会

第七回の山崎町美術展は、十月三十一日から十一月三日まで、山崎中学校体育会で開かれた。出品二百九十一点。審査の結果左記入賞者が決定した。

写真：：町長賞大井直樹（一宮町）教委賞小玉つかさ（岡山県作東町）美術協会賞玉田豊彦（太子町）町議長賞岡本寿男（竜野市）神戸新聞社賞木村雄（姫路市）商工会長賞西口幸宏（揖保川町）ライオンズ賞杉本博一（一宮町）

日本画：：町長賞西川八重（一宮町）教委賞片山吉恵（山崎町）美術協会賞秦誠（山崎）議長賞安原佐智（新宮町）神戸新聞社賞秦寿鶴子（山崎）商工会長賞森川幹弘（姫路）ライオンズ賞傳岡智代子（山崎）

洋画：：町長賞高原君江（姫路）教委賞大谷紀美子（姫路）美協賞高田充（安富町）議長賞兼田武久（姫路）神戸新聞社賞山本大輔（一宮）商工会長賞松尾文夫（山崎）ライオンズ賞榎高明（姫路）

書道：：町長賞平井春雄（佐用）教委賞平形秀哉（山崎）美協賞高田裕子（山崎）議長賞平山憲二（山崎）神戸新聞社賞西川悦子（山崎）商工会長賞中川つや（山崎）ライオンズ賞西川仙月（山崎）

工芸：：町長賞平本正弘（山崎）教委賞松井昭己（赤穂市）美協賞大前明（安富町）議長賞上山しな（山崎）神戸新聞社賞吉田和代（姫路）商工会長賞平瀬丹雲（千種町）ライオンズ賞島本つや子（山崎）

○　闇斎神社秋祭

十月十六日闇斎神社秋祭は、根岸神官によって厳修。式典後は、庸軒流の献茶式あり。尚、本祭奉賛として、剣扇舞大会が下村記念館で開催され、非常に盛会であった。

○　本多神社修築

八幡神社境内の本多神社は、腐朽甚だしきため拝殿等改築、九月二十六日落成式を挙行された。御祭りは、十月十七日例年通り執行。

○　御形神社復元

宍粟郡一宮町森添、御形神社はかねて解体中であった本殿の復元工事は、八月以来進捗し来年三月末完成予定である。同本殿は、室町末期大永七年（一五二七）に建立、中世神社建築の優れたものとして昭和四十二年に、国の重要文化財に指定されている。いたみが

ひどいので今回の解体復元に着工されたもので、総工費は一千九百五十万円という。

○　千種町に縄文土器

千種川の源ともいえる宍粟郡千種町河内、三室山高原キャンプ場から早期縄文土器がみつかった。千種川グリーンランドキャンプ指導員の池田致夫さんが土器破片を発見。その後県文化課村上紘揚技師・町文化財審議委員上山勝氏らの調査によって、黒土層の下に縄文遺跡のあることが確認された。同地は、中国山脈分水嶺から一キロ南下した標高約八〇〇米の高原地帯である。ここの土器は、氷の山の中腹すなわち、養父郡関宮町別宮縄文遺跡の出土品と類似しているといわれ、その研究が期待される。

後記

会報の発行延引のこと御詫び申します。次回からは、内容も整備し、きちんと発行したいと存じます。御援助の意味で、どうか何なりと原稿を御出し下さいますよう。

総会案内

○　い　つ　昭和四十七年一月十日午後一時

○　ど　こ　山崎町本町　長生会館

○　議　題　一、事業報告及び計画

一、会計報告

一、役員改選

一、そ　の　他

本会総会を右のとおり開催、副会長安井寅一氏の逝去により後任者選任等重要事項がありますので何かと御多用のことと存じますが、多数御出席賜りたく御依頼します。

各種高級印刷

山陽印刷所

山崎町山田

TEL②〇七三三